

ふるさと講座・歴史系～歴史の道を歩く～

「江戸・明治時代－遠太渡船場跡を訪ねる」のお知らせ！

- 日 時 平成24年6月24日（日）午前9時30分～12時
- 場 所 風蓮湖（集合・解散－郷土資料館）
- 講 師 別海町郷土資料館 主査 石渡一人
- 内 容 風蓮湖と外海への開口部に遠太という地名が残ります。幕末には漁番屋、明治に入ると渡船場や駅通などが設置され、交通の要所としての役割を担っていました。江戸・明治の様子を現地を訪問しながら説明いたします。
- 定 員 15 名（電話・FAX・メールにて氏名・電話番号を6月22日（金）までにご連絡ください。）



遠太（トウブト）

別海の歴史と自然 トウブト（遠太）

走古丹市街に入る手前で左折し砂嘴上を6kmほど行くと外海への開口部になり、そこは遠太と呼ばれています。幕末の探検家松浦武四郎や加賀伝蔵によるとアイヌ語で「トウブト＝沼の入口」という意味です。安政元年（1854）頃から漁番屋が設けられ、明治2年（1869）には中沢九兵衛という岩手県の人が、雑漁業のかたわら渡船を始めました。その後、漁夫が定住し、明治14年には駅通も設置されました。学校などもでき、集落が形成されましたが、漁業の不漁に伴って一本木（現在の走古丹）に移転したようです。



遠太から発見される食器

遠太付近の海中からは、陶磁器類（皿・碗・甕・急須の蓋・徳利・すり鉢）、金属製品（鋌、船釘）、木製品（樽）、大型の礫が多数見つかっています。皿の文様を見ると型紙摺のものが多いようです。型紙摺とは文様を付ける技法のひとつで、明治10年以降に鮮やかな青を発色するというコバルト釉が輸入されてから盛んに用いられました。このことから皿は、明治10年代～大正といった年代をあてはめることができ、遠太で生活を営んだ人々が使ったものであることは間違いありません。侵食が著しく、当時の姿は殆ど見受けられないものの、当時の別海への玄関口として重要な場所であったと考えられます。

近世の別海を探る 「西別川河口から北」～その8～

トホロ

近世文献資料の標記は「トウロ」「トホロ」「トーロヘツ」「トーロ」「トポロ川」「トホロ川」「トボロ」「トーホロ」があります。現在の当幌川をさします。



○地名の由来

☆〔トホロ〕

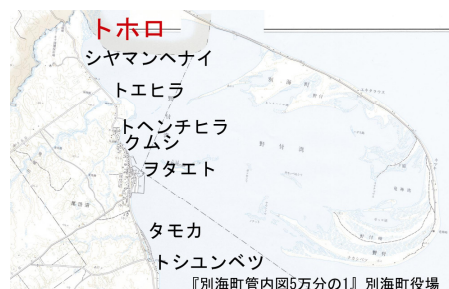
・「(川幅十餘間、遅流) 名義は沼川と云、此川上に沼多き號る。兩岸蘆荻原なり。」

『東西蝦夷山川地理取調紀行東蝦夷日誌』松浦武四郎 安政3年(1856)

☆〔トホロ〕

・「川有 沼(大きい) おふきへ」

『丙寅慶応二年正月吉日 万覚帳 安政六末年 子モロ地名和解書』加賀伝蔵 安政6年(1859)



○地勢・建物など

幕府直轄時代 寛政11年(1799)～文政3年(1820)

- ・「此処平山木アリ砂濱行川アリ幅三四間」『松前東西地理』高橋壮四郎ほか 寛政9年(1797)
- ・「川」『東蝦夷地各場所様子大概書』松前藩 文化5年(1808)

松前藩復領時代 文政4年(1821)～安政元年(1854)

- ・「川有。巾三十間。此処二而は湖凡立(縦)横とも凡二り位と思われる。」
『初航蝦夷日誌』松浦武四郎 弘化2年(1845)の記録)
- ・「此所に川有。幅三拾間程、深サ三尺程」
『古人の邑嚙 嘉永七甲寅年閏七月〔子モロ場所〕』加賀伝蔵 嘉永7年(1854)

幕府再直轄時代 安政2年(1855)～慶応3年(1867)

- ・「字トホロ 鮭漁場 川 巾三拾間程 深三尺程 右はシベツ山より流出水深さ凡拾五里程流寛くチカ小魚入川漁無之候」『根室旧貫誌』喜多野省吾 安政5年(1857)
- ・「トホロ鮭漁出張 ホロモシリ 当時チヤシコツ 板蔵 壺棟 梁間二間半 桁行二間 但杵屋根 板蔵 壺棟 梁間三間 桁行六間 但前同断」
『万延元年仙台様江御引渡諸書付綴込式冊之内子モロ会処控写』加賀伝蔵 万延元年(1860)

別海町郷土資料館だより No.155

発行日 平成24年6月1日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記

ヒグマが町内で出没し別海市街の住宅地に出ました。それも私の家の近くで、家に居て注意を呼びかける広報車にもまったく気づかず。おかげで、埋蔵文化財調査時には、鈴を持参して大きく鳴らして歩いています。(K.I)